

近代中国の始まり ～アヘン戦争～

今回学ぶこと

明朝が農民反乱で滅んだ直後、中国東北方で勢力を増していた満州族の政権であった清朝が中国を支配する。清朝は少数民族が大多数の漢族を支配するために、自制的な政治を行ったため、平和と繁栄が続き領土は拡大し、大帝国が築かれる。しかし、19世紀になると産業革命期のイギリスが貿易赤字を解消するため、インド産アヘンを中国に持ち込み、それが原因となってアヘン戦争が勃発、敗れた中国は近代への路を歩み始める。

調べておこう・覚えておこう

- 17世紀から20世紀まで続いた清は、どのような仕組みで広大な中国を支配したのか、整理してみよう。
- 東アジアの近代の幕開けとなるアヘン戦争について、イギリスと中国のそれぞれの立場から考察してみよう。
- 中国はどのように近代化を遂げようとしたのか、産業育成と政治体制の2つの側面から検討してみよう。

清朝の特色

清朝は、中国東北部に勢力を持っていた女真族という民族が打ち立てた。女真族は、狩猟採集や毛皮などの交易を主に行い、建国後には満州族と名乗るようになった。1644年に明朝が農民反乱で滅ぶと、すぐに中国を統治するようになった。清朝の皇帝は、満州族のリーダー、漢民族を支配する皇帝、モンゴル族帝王の称号ハン、チベット仏教最大の保護者という4つの顔を持っていた。それぞれの民族に向けた顔を持つことで、多民族を治めることができた。

中国で大多数を占める漢民族を、その満州族という少数民族が支配するために、清朝は明の制度を引き継ぐ一方で、独自の政策も行った。中央官庁の役人を満州人、漢人、同等に登用し、宮廷の正式文書も満州文字と漢字の両方を用いるなど、漢人との融和策を採った。安定した支配のもとで、中国は繁栄を遂げ、清の初めには1億だった人口は、18世紀なかば、乾隆帝の時代に3億に達した。しかし、19世紀に入ると、中国では増大した人口が社会の負担ともなり、大規

模な反乱が発生するようになった。

アヘン戦争

18世紀中頃から、イギリスでは、産業革命が始まっていた。イギリスは世界で自由に貿易することで、経済を発展させようとした。清朝は外国との貿易を統制し、政治的には朝貢関係しか認めなかった。イギリスなどの欧米諸国は、広州の港でしか交易することが許されなかった。イギリス政府から清に派遣された外交官ジョージ・マカートニーは、1793年に清朝皇帝乾隆帝と会見し、対等な国交と自由な貿易を求めるが、成功しなかった。

19世紀になると、イギリスは中国から大量の紅茶を買い入れるようになり、対中貿易は赤字になった。そこでイギリスは、インドで栽培された麻薬のアヘンを清に密輸し、そこで得た銀で紅茶を買うようになった。この結果、中国ではアヘン中毒者が激増し、清はその対策に迫られた。清はアヘンの密輸を取り締まるため、広州で強硬策を取り、さらに、イギリスとの貿易を禁止した。これに対し、イギリスは武力で対抗し、1840年にアヘン戦争が勃発する。イギリスに敗れた清は、不平等条約を結ぶことになった。

清から中華民国へ

19世紀後半、清朝でも産業の育成や軍備の近代化を図る洋務運動と呼ばれる動きが活発化した。しかし、政治体制の維持を前提として西洋化しようとしたため、表面的な改革に終わった。明治維新後の日本は、欧米列強にならうと、植民地獲得を目指した。1894年、朝鮮半島の支配をめぐる、日本の明治政府と清王朝が衝突し、日清戦争が勃発。この戦争に敗れた清の弱体ぶりがあきらかになると、清は西欧の列強国による侵略を受け、植民地にも等しい状況に置かれた。

清の経済は落ち込み、政治は腐敗した。こうした問題を解決するためには、新しい政治体制の必要性であると考えた人々が現れた。ハワイで近代的な思考を身につけた孫文^{そんぶん}は、外国支配からの脱却と自主自立を民衆に訴えた。1911年、清朝の軍隊の反乱をきっかけに辛亥革命^{しんがいはい}が起きると、清朝は対処することができず、皇帝は退位した。翌年の1912年、孫文は中華民国の建国を宣言、アジア最初の共和国が誕生した。しかし、新しい国の形を求める模索は、その後も続いた。